

視察報告書

委員会名	総務文教常任委員会
視察日時	平成 29 年 5 月 17 日（水）10 時 30 分～12 時 00 分 海潮地区振興会 13 時 30 分～15 時 30 分 雲南市役所
視察先	島根県雲南市
視察項目	雲南市の小規模多機能自治について・デマンド交通について
視察参加議員	笹栗純夫、堀田勉、谷口一成、小島忠義、三嶋栄幸、柳明夫、岡村一伸、高橋徹郎

視察概要

雲南市の概要 面積：553.4k m² 人口：39,032 人 世帯数：12,527 世帯
雲南市は平成 16 年 11 月 1 日に 6 町村が対等合併により生まれた市である。
島根県東部に位置し、松江市、出雲市等に隣接していて海がない地域となっている。
高齢化率は日本を 20 年先行した状態であり、人口減少、少子高齢化は地域社会の崩壊の危機を招くという認識のもと、雲南市のまちづくりの基本姿勢として「協働のまちづくり」を掲げ、住民発意による地域自主組織を結成していく。
その地域自主組織（小規模多機能自治）による住民主体のまちづくりについて視察する。

I 小規模多機能自治について

平成 19 年度 市内全域で自主組織が結成される 44 組織
平成 27 年 市全域で 30 組織となる（統合、一体化などがあつたため）
地域自主組織の人口規模は約 200～6000 人程度（平均約 1,350 人）
世帯数は 約 60～1,900 世帯程度
活動の拠点：公民館を交流センターとして整備、そこが拠点となっている。
公民館では生涯学習だけであつたが、交流センターとすることで、
生涯学習、地域福祉、地域づくりまで網羅する活動拠点となった。
活動に対する予算措置：事業への補助金
総額：2 億 8 千万円（一団体平均：800 万円程度）
（人件費（定額）及び人口・面積・施設の利用人数などの従量制による積算）
小規模多機能自治と自治会・町内会・区の主な違いは、
小規模多機能自治の方がより広域的で、常勤スタッフ体制（人件費の補助金あり）があり、
イベント（行事）型から課題解決型となっていることである。

小規模多機能自治の各地区での取り組み例

①安心安全の見守り事業

市水道局との委託契約で水道の検針をしており、毎月の検診の際水道のない家も含む全世帯を訪問し、声かけを行なっている。

②笑んがわ市事業

JAの空き店舗を活用し、毎週木曜日に開催、地元生産者が作った新鮮野菜、果物の販売（生産者のお小遣いになる）。また憩いのコーナーによるふれあい。憩いのコーナーは200円でコーヒーが飲めるが、地元のボランティアさんが料理を大量に持ち込んでおり、そこで利用者がおしゃべりをして楽しいひと時を過ごすことができる。

③地域芸能の復活

太鼓や神楽の復活（小学校、中学校での指導）

地域自治協議会の現在の問題点

- ・ 地域の団体では法人格がないため税の優遇が得られず黒字が出ると税金で取られる。
また、銀行からお金を借りることができない。
→現在、総務省で問題を検討中
- ・ 進んだ地域と、そうでない地域により取り組みに差が出てきた
→会議の場で意見交換などをして底上げをしていく
- ・ 若い人の参画が進まない・活動が家族を養える収入にならない
隣に出雲市、松江市があるため、そこに居を構えてしまい雲南市から出て行ってしまう。
だが、見方によっては、そこに居を構えながら地域のごとには帰ってきて参加しているという見方もできる。

II デマンド交通について

雲南市では旧町村のバス運営を継承（民間路線バス事業者撤退）している、広域バス1路線、4つの地域のバス路線、だんだんバス・だんだんタクシー（デマンド型の公共交通機関）を整備している。

デマンド型とは・・・

大まかな路線と時刻を定め、一定区域内を予約に応じて運行するもの。なお、雲南市では、10人乗り以下をだんだんタクシー、11人乗り以上をだんだんバスと呼んでいる。

利用の方法：予約者の家を回り乗客を拾っていく。（1人でも迎えに来てくれる。）

出発時刻の30分前までに予約が必要。

予約が入らないときは運行が取りやめになる

デマンド料金：1回の乗車は300円均一となっている。（路線バス200円）

路線バスとの違い：路線バスは朝夕通学利用の多い時間帯の運行で、予約の必要がないため、乗客がいなくても運行する。

デマンド交通は主に高齢者の通院、買い物等に対応した時間帯の運行で、予約必要であるが、家の前まで来てくれる。ただし、予約がなければ運行しない。

利用状況：H27 22,491人 → H28 28,792人 60代以上の女性の利用が多い

アンケート調査：「満足」「やや満足」が約8割

利 用 目 的：通院、買い物、銀行等の金融機関の順となっている

年間の運行経費：5,000万円強（他の路線バスを含めると全体として2億円+車両の更新費用）

デマンド交通の経費は年々増加傾向であるが、
一方で市民バス運行事業費が年々減少している。



交通空白地郵送運送

なお、だんだんタクシーでもカバーできない地域の移動手段として交通空白地有償運送の活用も考えているとのこと。

有償運送登録のポイント

- ・ 運行主体・・・法人格の有無は問われない。地域組織も対象
- ・ 運送の対象・・・原則地域組織の範囲に住む住民の方
- ・ 運送の対価・・・タクシー運賃の半分程度まで
- ・ 運送区域・・・地域組織の範囲程度
- ・ 運転者・・・一種免許でも講習により可能（費用：1万円前後）
- ・ 車両・・・5ナンバー（乗用）が基本。貨物用不可。所有は不問
- ・ 車両保険・・・無制限が望ましい。搭乗者保証もあった方がよい
- ・ 責任者（運行・車両整備）・・・商用車4台までなら資格は不要

Ⅲ雲南市海潮地区小規模多機能自治について

島根県雲南市の中にある海潮地区で実践している小規模多機能自治について海潮交流センターにて海潮地区振興会の会長より説明を受ける。

海潮地区について

人口：1,700人、面積：38.36k㎡、世帯数：500世帯

自治会数：15自治会（自治会には住民の96～97%が参加）

学 校：中学1校（27人） 小学校1校（62人） 幼稚園1園（16人）

海潮地区地域自主組織：自治会、女性グループ、延寿会、PTA、消防団、体育協会、JA、森林組合、農業委員、民生児童委員、神楽社中、盆踊り保存会など40団体で構成

主な取り組み

- ・ リーダー研修（先進地視察）（30年ほど続けている）
- ・ 子育て支援事業
 - うしおっ子ランド（幼稚園後の子の預かり 幼稚園がこども園に移行し役目終了）
 - うしお児童クラブ（小学校後の子の預かり）
- ・ 温浴施設の管理、運営
 - 市から受託。料理は自分のところで作らないなどの工夫をして赤字が出ない工夫をしている。しかし、その結果市からの委託料が下げられたとのこと。

- ・ ため池百選「うしおの沢池」整備事業
- ・ 観光ルート整備事業
- ・ うしお郷土館の整備
- ・ 定住対策事業（定住支援、空き家リフォーム事業、空き家調査、田舎暮らし体験ツアー、UI ターン交流事業、出会いの場づくり）
- ・ うしお祭り他文化活動、地区体育大会他体育関係事業
- ・ 安全安心な地域づくり、各種グループ活動事業支援
- ・ 福祉事業（一人暮らし高齢者交流、認知症予防、給配食サービス支援、要援護者避難支援事業、デマンド型乗合タクシーの運行）
- ・ 団体、グループの活発な地域活動（中学に神楽部があり、H28年には小学校にも神楽部ができた 地元の4つの社中の指導者が子ども達の指導にあっている）



「うしおっ子ランド」の保育

いろいろな事業を行なっているが、活動資金として、市からの交付金以外にも住民から1年7,500円の負担を集めている。

市からの交付金に対する地元負担は1年目1割、2年目3割、3年目5割、その後自立温浴施設の委託料なども財源となっている

地縁組織で温泉の委託を受けているため利益が上がった時のお金の問題（会長の収入となり、税金がかかってくる）などがあり、地縁組織が委託する時の問題などを制度、法律的に改善してほしいと国に要望、働きかけをしている。

課題として

- ・ 人材の育成、新陳代謝、後継者の育成が必要（特に会長、責任が大きく、次のなり手を確保する上でも課題）
- ・ 中学校閉校の議論が起こっている。一度は閉校にならずに済んだが、子どもの減少からいつ議論が再燃するかわからないとのこと。（地域内に教育施設があることは非常に重要と考えている。）
- ・ 自主組織の活動が活発であるが、定住人口が増えているかということ、現実としては減る方が多い。
- ・ 空き家はあるが、仏壇があったり、お盆や正月には帰ってきたりという理由で、貸し出せる空き家が少ない。
- ・ イベントが多く負担になっているため、住民の中でイベントを減らすという意見もあるが、なかなか減っていない現状がある。しかし、組織として10年経ったのでイベントや事業の洗い直しをしようという話も出てきているとのこと。

《本市にとって活用すべき事項・課題》

本市においては校区運営協議会や校区振興協議会が雲南市の地域自主組織に当てはまるものであると思われる。さらに糸島市の校区運営協議会等も校区のたくさんの団体で構成されており、組織の形態も似ている。その上で、以下のことを考えてみてはどうか。

- ・海潮地区が温泉の運営を委託していることについては、地元の財産を生かし地域が収益を上げる可能性を示してくれたと考える、糸島市の地域の財産の有効活用のヒントになるのではないか。
- ・雲南市が公民館を地域交流センターとして生涯学習だけでなく、地域づくり、地域福祉まで網羅した拠点としているところは今後の公民館のあり方として参考になるのではないか。
- ・デマンドバスについては前原市で導入をしたことがあるようだが定着しなかったようである。

原因の分析が必要だが、運転免許返上の機運が高まっている今免許を返上した人たちの足を考えると、特に山間地の高齢者の移動手段として研究する必要があるのではないかと考える。

また、糸島市では無料の自主運行バスの運行をしているが、ボランティア運転手の負担が大きいと聞く、ボランティア運転手に対する負担を少しでも軽減させるためにも公共交通空白地有償運送の研究をしてもいいのではと考える。

最後に（移住定住を増やすためには）

雲南市のように、地域が主体となって、いろいろな活動をして、いろいろな人と交流（地域内の交流、地域外から来た人との交流）していることが、移住者を受け入れる心の障壁を取ることにつながると思われる。言い方を変えれば、地域住民の受け入れ姿勢の熟成になっているのではと感じる。（何もしないでいると気持ちが内向きになり、よそのものを受け入れ難くなるのではないか。）

この視点から移住定住を増やすためには小規模多機能自治の考え方は大変重要だと考える。しかし小規模多機能自治を進めたからといって移住者が増えるわけではない。

移住者を増やすためには、住宅地の確保、空き家の活用、財政的な支援、幼保施設、小学校中学校の距離的な近さ、そして何より仕事の確保が問題になってくる。その点については今回の視察先でも同じ問題を抱えていると実感した。